おお大勝利

平成 27 年度山東サッカー部報第 16 号（1 月 15 日）

サッカー部保護者の皆様、ＯＢ・ＯＧの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

新年明けましておめでとうございます

皆さま、新年明けましておめでとうございます。今年も山東サッカー部並びにこの部報よろしくお願い致します。

昨年は「ひどい年」でした。公式戦の勝利は右手で収まる数。勝ち星が少ないのは春も秋も地区大会のトーナメント一回戦で強豪と当たった等の事情がありますが、やはり県レベルの大会（県リーグ・県総体・選手権県大会）で勝ち抜けなかったことが大きい。それもこれも監督（私）の手腕の問題と受け止めています。昨シーズンオフ期間も練習をしっかり取り組んでいたつもりでしたが、良く言えば「総合的な練習をしていた」、悪く言えば「焦点の不明確な練習をしていた」とまとめられるものだったかもしれません。

この冬は、昨年の轍を踏まないために、**明確なテーマの下練習しています**。今シーズン、応援に来て下さった OBOG や保護者の方々をたくさんがっかりさせてしまいましたが、来シーズンは**成長を実感できる試合内容**をお見せします！　そして結果としては、**もちろん県総体優勝、Y2 優勝が目標**です。昨年同様の応援を引き続きよろしくお願いします！！

とまあ、このように書きましたが、これを書いている私が来年山東に残留する保証はどこにもない。もちろん山東サッカー部は「永遠に不滅」ですし、私も OB の一人として山東サッカー部を応援し続けることに変わりありません。が、顧問はいずれ異動する定めにある。一昨年に部報新年号でこう書きました。

> 前任校は進学校とは対極にあるような学校であり、サッカー部も半分が初心者でしたが、それぞれにやり甲斐があり、異動は絶対にしたくない中、異動が命じられ、渋々山東へ赴任いた、という思い出があります。そんな重い気持ちで赴任した山東も、「住めば都」。まだまだ居座る野心はあるのですが・・・9 年目に突入できますでしょうか？　**できなかったら、この部報は 3 月で終了**ということになりますよ～。まあ、**勝手な予測で言いますと「75％残留」**でございます。

それを受け、昨年の新年号でこう書きました。

> 昨年の残留確率 75%というのも全くあてずっぽうですが、その数字を前提に、あと 10 年残留する可能性はない（残留確率が 0%になる）と考えてみたときに、今後 1 年で 7%ずつ残留確率が減っていく、とまあ大雑把に言えるのではないでしょうか。ということは、**来年度の残留確率は 68%**となります。確率的には 50%を超えているので残留する可能性の方が高いと言えますが、パチンコ等の愛好者の方ならその数字がいかに信頼おけないものか、よくおわかりかと思います・・・。

この「計算式」を前提にすると、**来年度の残留確率は 61%**となります。現在 2 学年担任なので、今年の異動はないのではないか（もう一年は行くのではないか）、と勝手に高を括っ

ていますが、どうなりますことやら。ぜひ新シーズンも山東で顧問をしていきたい希望はありますので、その希望を前提にこの冬をチームとともに乗り切りたいと思います。

1年生大会 初戦敗退

昨年 11 月に行われた大会ですが、顧問今野の怠慢により報告遅れてしまいましたので、今号でご報告いたします（次の納会の報告もそう）。

11 月 28 日（土）29 日（日）村山地区の 1 年生大会が開催されました。山東の初戦の相手は山形明正。10 月に選手権の予選で負けている相手ですし、何かと因縁を感じる。明正の三年生も戦力の充実した学年でしたが、この一年生の代も選手が揃っている印象あり。とはいえ、正確な相手の戦力は分かりませんし、正直こちらも、どのくらいやれるのか手探り。ということで､やってみないとわからない試合が前日からの雨天の中明正 G にてキックオフ。

試合が始まると一進一退。山東も丁寧にビルドアップし、ボールを保持する時間もある。しかし、ゴールに迫る迫力がない。迫っても、決定的なシーンを作れていない[1]。明正の方がシュート数は多かったかもしれないが、明正も決定打に欠ける。そんな我慢比べのような展開が後半まで続く。後半の中盤に、山東最終ライン中央付近で明正のアイディアあふれるパスワークがさく裂し、するりと抜け出され、GK との 1 対 1 もあっさり決められ、失点。そして、そのまま**0－1で負け**。

山東の 1 年生（や２年生）、**ドリブルや決定的なパスにて≪自分で打開する≫狙いが一人一人足りず、寄せられるとすぐ味方の援護を求め≪パスで逃げる≫プレーが多すぎる**。もちろん、狙いだけではだめで、その狙いを可能にする技量も必要なのですが、**そもそもその狙いを持っている選手だけがそれを可能にする技量を身につけようと必死に努力するもの**[2]。と

---

[1] かなり前のことなので、記憶も薄れがちですが、ベジータが左サイドの深い位置ゴールライン付近でゴールに迫るドリブルを試みて成功しかけましたが、判定は惜しくもラインを割ったというものが、記憶に残っている惜しいシーン。割ってなければ角度のないところからシュートとか折り返しズドンとか、色々あり得ました。と考えると、本当に惜しいシュートはゼロだったかもしれません（シュート数は複数あっても）。

[2] たとえば、私が高校生の頃の山東の選手の多くは、相手に読まれずにいろいろな方向に瞬時にパスを出せるように、**アウトサイドキック**の練習を繰り返ししたものです。これができると（ロナウジーニョのような不自然なノールックではない）自然なノールックパスが可能となります。アウトサイドは体の向きと違う方向に自然とボールを出せるからです（インサイドでそれをやるには工夫が必要）。**なぜそのキックを練習したかと言えば、やはり自分のパス（キック）で打開したい、との思いが強かったから**ではないでしょうか。しかし、現在の山東の選手でアウトサイドキックを練習している、と言える選手は**ユート**くらいなもの。他の選手が行うアウトサイドキックは 5m 先の味方に出すものばかり（しかもアウトをあえて使う必要もない状況でのものばかり）で、20m 先の味方に出すキックができる選手は皆無と言っていい状況です。ちなみに、この傾向は、現在の 1、2 年ばかりでなく、引退・卒業した先輩方、たとえば、カツミ（現 3 年生）、マロン（山東 65 回卒）、ヨシタカ（64 回卒）などの、その学年でも技術に秀でていた選手たちにも同様に言えました。ヨシタカやマロンには、よく、**中央から右足で右斜め方向にパスをしたいのなら右足アウトフロント（アウトサイドキック）で出せるようになりなさい**と注意していました。インステップ（インフロント）だと、右方向に体を向けるので、相手がそれを読み、ギャップ（選手間の間隔）を閉めたりインターセプトを狙ったりして、パスが通らないことが多い。**アウトフロントだと、体を正面（相手ゴール正面）に向けたまま右斜め方向に蹴れるので、相手からすると直前までどこにパスが来るかわからず読みにくい**（左方向へのパスは正面を向いたまま右足で蹴ることができるので右利き選手の場合問題はない）。加えて、しっかりとボールを右側に方向付けしてないと、「トラップ⇒ルックアップし右方向へのパスを選択⇒右足で右方向へ蹴りやすい場所にボールを置きなおす（持ち直す）⇒蹴る」という 4 段階を踏みますが、**アウトで蹴れれば「トラップ⇒ルックアップし右方向へのパスを選択⇒蹴る」というように持ち直す必要がなく時間をかけずにプレーできる**ためパス成功率が上がる（もちろん左足がうまければ

すれば、**もっと一人ひとり、≪自分で何とかしてやる≫姿勢が必要**。それがあるチームは、パスを回していても、相手からしたら隙を見せたらすぐ付け込まれそうな迫力が出てくる。それがないと、みんな≪逃げのパス≫をするばかりで、ボールはゴールから遠いところを移動するものの一向にゴールに迫れない。

とまあ、課題が浮き彫りになる試合ではありましたが、悔しい経験を活かせばいいんです。応援ありがとうございました。

納会終了　三年生受験頑張れ！

12 月 10 日（木）**第 34 回**山東サッカー部納会が恒例の中島商店にて行われました。この企画、**マネージャーが作成した一年間の公式記録集**を片手に、OB 会がふるまってくださるすき焼き鍋を囲みながら、一年のまとめをするもので、今年で 34 回を迎えました。**初回は、元 PTA 会長にして OB ヨシタカのお父様の丹野さんが 3 年生の時**だったようで、**一昨年 4 月亡くなられた武田栄四郎前 OB 会長の肝いりで始められました**。OB 会からは清野名誉会長・岸会長はじめ 7 名（齋藤 GK コーチ含めると 8 名）も集まって下さり、選手数が少ない分、会を盛り上げて下さいました。

まず会長から今年一年の悔しさ嬉しさを総括するお話と 3 年生への受験の激励のあと、5 名の優秀選手賞を発表し表彰した後、乾杯（その 5 名と授賞理由は下の通り）。さまざまな作り方がすき焼きにはあろうかと思いますが、現役生は思い思いの「鍋」を作っておりました。途中、OB の方々から激励の一言を頂戴し、2 年生キャプテンの感謝の言葉があった後は、3 年生の決意の言葉。力強い宣言と心配になる宣言と両方ありましたが、**納会で蓄えたすき焼きパワーをぜひ勉強で発揮し、志望の実現に向けて頑張ってほしい**と思いました。

二次会は、これまた恒例の寿屋にて。おそば屋さんで飲むそば焼酎（焼酎のそば湯割り）は格別で、毎年楽しみにしているのですが、今年も堪能させていただきました。私も、センター指導に向けた英気を頂きました。ありがとうございました。

齋藤樹 パワーとテクニック、スピードを兼ね備えた頼りがいのあるＤＦ。上背はさほどではなくヘディングが特別強かったわけではないが、対人の強さはピカー。高校に来て、左足でのボールコントロールを向上させたため、左右どちらで持たせてもボールを奪われなかった。それゆえ、しばしばオーバーラップしドリブルで何人も振り回しゴールも決めたし、アシストもした。ボールが収まるのでＣＦとしても能力があった。要は、どこをやらせても人並み外れた仕事のできる優れた選手。パスの配球のセンス・プレースキックの精度等、まだまだ伸びる余地はあり、大学に行ってからの活躍が楽しみだ。ただ、彼ほどパワーとスピードがあるのなら、大学でラグビーをやっても面白い。彼なら、将来ラグビー日本代表に入っても、驚きではない！
會田三郎 間違いなく、この学年の選手の中でもっとも伸びた選手。一学年上のＧＫ大野の伸びも驚きだったが、三郎の伸びの方が大きい。入学当初は体が全く出来あがっておらず、遅い飛び出

右足アウトの使用頻度を上げる必要はそれほどありませんし、ボールが来る前に右側方向へのパスを決定していればワンタッチ目で蹴りやすいところに置けるので持ち直す必要がなくアウトサイドを使わずにプレーできます)。しかし、技術の高かった彼らも、アウトサイドキックの技術は最後まで身についたと言えませんでした（右足アウトでカーブをかけながら必殺のスルーパス！　などというシーンはついぞ現れませんでした)。

し、のろいステップからの重たいセービング、まったく飛ばないキック、大きな声でコーチングできない消極性と、何一つ褒めることできない状態だった。1年生の時は、チーム内でゲームをすると、ゴールキックが飛ばずに手前の相手ＦＷに渡りそのままゴールを許すなど、ＧＫのせいで負けることが多く、「大野が引退したら、山東は終わるな」と顧問のみならず同学年のチームメートの誰しもが予想した。しかし、ストイックな性格で、齋藤ＧＫコーチの下コツコツとトレーニングを積み、フィジカルの能力も向上すると、2年になったくらいから急に頼り甲斐が増し、徐々に積極的なコーチングもできるようになり、ファインセーブを連発するようになった。寡黙なようで、実は当意即妙な受け答えのできる突っ込みのスペシャリストとして人気があり、山東祭実行委員長を務めたことも思い出深い。

吉田晃太郎

まず、あだ名がシャモジと訳がわからない。シルエットがシャモジに似ていることから、山東サッカー部の先輩が命名したそうだが、サッカー部のみならず学年中みんなからシャモジと呼ばれ愛された。プレーはフィジカルの能力に頼る傾向にあり、スキルも中学まで磨かずに来たおかげで高校に入って全く活躍できなくなり、壁にぶつかった。しかし、ボールを奪い取るディフェンスの能力は高校でも伸び続け、通常寄せ切れないところも無理やり寄せることができ、体を張ったプレーでチームを助けた。自陣ゴール前で相手に十分なシュートを打たせない粘り強い対応は本当に素晴らしかったし、魂あふれるプレーでチームを勇気づけた功績が大きい。言葉悪いが、こんなに下手なのにあんなに頼りがいのある選手もいない。グラウンドマネージャーとして苦労しながら練習を指揮した功績も大きい。

武田良太

この学年はこの選手に触れない訳にいかない。これまで足の速い選手はいろいろ見てきたが、5mのダッシュ力に秀でた、サッカー選手に必要なスピードをここまで持ち合わせた選手は、かつていなかった。間違いなく、過去10年の山東の選手の中でＮｏ．１のスピード。それでいて、パワー系のシュートあり、ＧＫをあざ笑うコントロールシュートありで、決定力もある。26年度、出場試合時間を正確に測れば、一試合平均2点は決めているだろう。試合になると彼ばかり決めるものだから、「そろそろ違う選手の得点が見たいよ」などと贅沢な嘆きをよくしたものだ。彼のあだ名ムンタリの名は、県内に鳴り響いていた。惜しむらくは、怪我・故障が多く、2年半の高校サッカー生活の中でハードなトレーニングを積む時間があまりに少なかったこと。ドリブルのスキルはまだまだ甘く、伸びる余地はあるので、大学でトレーニングを積み医学部の大会等で暴れまわる彼の姿に期待したい。

堀川太一

人数は少ないが個性あふれる学年を主将としてよくまとめた。部員に誠実かつ公平に接する彼の人間性は、まさにリーダーにうってつけ。素走りなどの地味な練習でも手を抜かず自分の背中で部員に範を示し、ピッチでも一切手を抜かず走り、恐れることなく飛んだ。そのためか、ヘディングの競り合いで相手の頭が複数回顔面をヒットし、病院に担ぎ込まれることが一度ならずあった。当初ＣＢであったが、その後ボランチになり、最終的にはＣＦを務めた。それらコンバートは必ずしも彼の希望ではなかったかもしれないが、常に与えられた役割をしっかり果たすべく努力を怠らなかった。引退セレモニー時の発言から彼自身よく理解しているようだが、今後は、彼自身自らに課すストイックさを、周りにも持たせるような厳格な牽引力も身につけ、さらに器の大きなリーダーを目指してほしい。彼なら目指せると思う。

充実の正月埼玉遠征を終えて

１月３日～5 日、**このたびで４年目となる埼玉遠征**を行ってきました。**埼玉県立越谷西高校サッカー部さんに合同合宿して頂く、本当にありがたい遠征でした**。また、**選手が 23 名[3]と少ないので、OB4 名（内１名は GK コーチとして OB の大築君）の力を借りて遠征してきました**。4 名の OB とは、**山形大学３年の大築君（山東 62 回卒）、東北大学２年の堀込君（63 回卒）、千葉大学２年の丹野君（64 回卒　注２で登場するヨシタカ）、明治大学１年の草壁君（65 回卒）**です。大築君は３年連続、堀込君は２年連続の埼玉遠征。その他の２名も、正月だというのに、後輩のために喜んで？駆けつけてくれました。まず、３日 6 時に出発し、浦和駒場スタジアムに直行。選手権の３回戦を観戦[4]。

そして第二試合の前半まで観て、越谷西高校へ行きすぐ越西と練習試合。練習試合では例年以上に格の違いを見せつけられましたが、押される試合でいかに粘り強く戦うか、というこのチームの課題を改めて認識させられ、課題が明確になりました。翌 4 日は同じく越谷西 G にて越西と春日部高校との３チームで練習試合（3 日の越西さんは新人チーム、4 日の越西さんは３年生チーム）。A は前日よりは粘り強く戦うことができ、B は OB の力を借りながら最後まであきらめない戦いぶりをみせる。

いずれにせよ、**関東のチームは、攻撃のテンポに変化をつけることができる（攻撃に緩急の変化がある）**。ゆったり回しているところから急に急所に（ゴール方向に）ググッと入ってくる。だから、ゆったり回されている時にしっかり対応していると思って安心していると、安心に付け込まれ急にピンチを作られる。**対して山東は、いつも焦っている**。もちろん、よく周りを観ることができていない、という**≪判断の問題≫**でもありますが、少なくとも独力でボールを保持し続ける自信（その裏打ちとしての技量）がないので、ボールを奪われてしまう恐怖感があり、無暗矢鱈に焦る（という**≪技量の問題≫**）。こういう現状なので「焦らずプレーしよう」と呼びかけても無駄。焦らずプレーできる技量を身につけさせ自信を持たせながらしっかり判断する癖をつけさせない限り、ダメ。すなわち、試合当日の指示で変わるものではなく、普段のトレーニングの出来が問われているということ。

そしてその焦りの結果、矢鱈にバックパス（横パス）を多用し、後ろから前線に放りこむことになる。**前方にボールを運ぶための、運ぶ準備（動きなおしてマークを外しつつ前線の情報を入手する時間稼ぎ）のためのバックパスなら、狙いのあるバックパスとして一向に構わない**が、まったく前線（前線でボールを要求する味方選手）を確認せず、プレスに来る相手に合わせてバックパスをしているだけの、**狙いのないバックパス（横パス）**が多い。それを中学までは「丁寧にサッカーしている」と評価されたのかもしれないが、**高校レベルではバックパスの多いチームは逆に雑なサッカーになる**[5]。横パスの多いチームも、どこかでスピ

---

[3] １年安達が当日急な体調不良のため休みましたので、結局選手 22 名、マネ２名の計部員 24 名で遠征実施しました。

[4] この合同合宿の企画、毎年妻の実家（埼玉県春日部市）に年末年始帰省し選手権を視察している私が、（自分だけでなく）選手権を選手たちにも観せたい、だけど観せるだけでなく折角だから練習試合もしたい、という思いが募り、偶然あるフェスティバルであった越谷西高校さんに話をして、実現にこぎつけたものです（最終的には東海大山形さんに話をつないでもらいました）。

[5] バックパスの多い選手に良い選手はいない、とも言えます。だってバックパスは誰にでもできるのですから。**縦パスがうまい選手が良いパサー**なのです。こういう話は、ザックジャパンの惨敗の後、「縦に速いサッカー」が流行りだから言っているのではなく、昔から（私の現役のころから）ずっと言われてきてい

ードアップできなければ、ただボールを回しているだけの何を目指しているのか分からないサッカーになります。**この点で OB のヨシタカのプレーは常に縦を狙っており、良い手本となっていました（バックパス横パスをしても、縦を狙う中でのバックパス横パスなので、ヨシタカのプレーは論理的＝サッカーの優先順位をふまえたもの、でした）**。サンペーなど、現チームの中盤で技量のある選手も、前線の動きをよく観ていると感心させられることはまずありません（対してヨシタカはゆっくりパスを回していると思ったら突然ワンタッチで、FW の足元に縦パスを入れてリターンをもらいにスピードアップしたり、裏のスペースにボールを配球したり、逆サイドにパスしたりしておりました）。

最終日は岩槻高校さんにお世話になり、午前中練習試合をさせてもらう。そしてこの日、**大学 1 年生の OB 森谷君、大野君、情野君（いずれも山東 65 回卒）**が応援に来てくれる。もちろんまだまだ体が動くので、道具を持ってきていませんでしたが強制的にプレーすることに。A チームは、GK の安定性（特にハイボール）、ディフェンスにおける CB とボランチの連携（バイタルエリアのケア）において課題を感じさせました。B は OB が躍動し、観ていて楽しい。**特に堀込は、体を入れてボールを奪うのもうまいし[6]急所に入って行くドリブルもうまい**。OB に乗せられているからかわかりませんが、**2 年ユウタロウ**は特に溌剌とプレーしているように見えました（PK は外しましたが）。岩槻高校さんのクレーコートの質の素晴らしさも目を見張るものがありました。

春日部高校さん、岩槻高校さん、そして何と言っても越谷西高校さん、本当にありがとうございました。また、帯同してくれた OB4 名、そして応援に来てくれた OB3 名、本当にありがとう。**OB がしっかり現役生の面倒をみる、という絶えることのない山東サッカー部の良き伝統**を垣間見ました。保護者会からは激励金頂戴しました。ありがとうございました。

雑感あれこれ

部報の紙幅に余裕がありますので、とりとめもないことを記します。

その 1

部報 13 号にて、前校長・元顧問佐竹俊明先生の 9 月 23 日の急逝について報じました。その際、ちょうど佐竹先生が亡くなられたのと同じ時刻に私の G ショックが止まった（デジタルが消えた）という「偶然の一致」にもふれたかと思います。「電池がなくなったんだな～」と思い、修理に出すと、電池は生きているとのこと。何らかの理由（接触不良？）で止まっただけだとのこと。修理代もかからず復活して戻ってまいりました。となれば、尚更、あの「偶然の一致」は何だったのだろう、と考えてしまいます。

る話です。

[6] この点、現役生は、相手と対峙した時、**ボールを突くだけの守備**で終わることが多く、突かれたボールがマイボールにならないことが多い。たとえば相手が自分から見て右側にかわしにかかって来たとき、右足で奪い切れればいいのですが、結局ボールを奪おうと右足を伸ばし触ったとしても体勢が崩れていてボールを確保できないことがしばしばある。**そういうときは左足を伸ばし、相手とボールの間に体を入れながらボールを確保する必要がある**。それが軽いプレーをしない対応（この場合軽いプレーとは、右側に抜きにかかった相手に右足を出したがボールに触れずそのまま抜かれる、というプレー）。1 年タイセイなどは J の下部組織で育った山形のサッカーエリートながら、そういう基本的な体の使い方が身についていない。または、**守備においても左足を使えない**という問題かもしれません。

その２

昨年本当に胸を熱くさせられた出来事に、ラグビーのワールドカップにおける日本代表の活躍がありました。私はラグビー部のある山形一中出身でして、クラブ活動はラグビーを専攻しておりました（部活動はもちろんサッカー）。当時体育の先生にラグビーの専門家がいて、教えてもらいながら楽しくラグビーに興じていた記憶があります。ロングパスする際に用いられるスクリューボールも、（当然質が低いながら）左右どちらも投げられるようになるまでに上達（恐らくいまでも少しはできます）。よく山形一中の校舎から、一中ラグビー部と同じグラウンドで練習している日大山形ラグビー部（当時新興勢力の山形中央よりもまだ強い県内一のチーム）の練習を眺め、パスするフェイントをしながらクネクネ突破する或る選手をずっと目で追っていた記憶があります。

そんな経験から、ラグビーは他の競技と比べ私の中で身近なものでした。当時は新日鉄釜石後に神戸製鋼が台頭してきており、大学ラグビーも早明戦や早慶戦は国立が満員近くになるなど、サッカーよりも明らかに人気スポーツでした。そんな中、93 年以降サッカーがプロスポーツとして成功し、日本代表もワールドカップに出場できるようになると、サッカーは野球に次ぐメジャースポーツとして台頭し、ラグビーとの関係は逆転しました。ラグビーとの関係の問題ではなく、一サッカー関係者としてとてもうれしいサッカーの台頭でした。

しかし、その陰で、サッカー等のメジャースポーツにばかり子どもたちが集まり、競技人口を奪われて、他スポーツが伸びない、などの話を近年聞きます。日本サッカー協会は、スポーツ全体の発展、スポーツ文化の隆盛を活動方針に掲げつつも、少子化が進む中（強欲にも？）これからもまだまだサッカー競技人口を増やそうとしています。恐らくラグビー界も、競技人口の低下に歯止めがかからず、苦しんでいたかと思います。そんな逆風の中でのラグビー日本代表の活躍でした。勇敢で粘り強い戦いぶりに胸を打たれた、というだけでなく、「自分たちの戦いによって日本にラグビー文化が根付くことになるんだ」という強い責任感を感じました（その点で女子サッカーのなでしこジャパンの選手たちにも同じ意識が流れているのを感じます）。サッカー日本代表（男子）の試合を観ていると、「つかしてんじゃねえよ」「もっと貪欲にやれよ」と不愉快になることがしばしばあるのですが、ラグビーの選手たちからは我が身を犠牲にしてでも全体の勝利を目指す清々しさしか感じませんでした。

今後ラグビー人気にますます火がつき、ラグビーの楽しさをわれわれに感じさせてくれることを願ってやみません。もちろんそれは、サッカーにとって競技人口の面でもテレビの枠の面でも強敵が出現するということでしょうが、同じフットボールとして（サッカー＝アソシエーション式フットボール、ラグビー＝ラグビーフットボール）共に隆盛を目指したいものです。合わせて、メジャースポーツの責任とは何か、という問題も今後考えていきたいと思いました（私が考えても何も現実は変化しませんが）。